

2018 年度 立命館附属校 教師塾（新任研修）Ⅶ

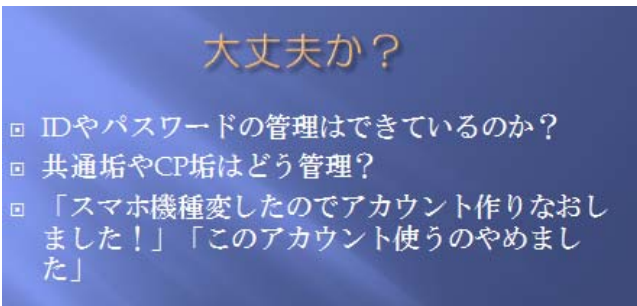
附属校教育研究・研修センター

第7回の教師塾は、11月13日（火）立命館宇治中学校・高等学校マイスター・ティーチャー木村 慶太先生から「授業力」に結びつく、「情報化社会の現状と情報モラルについて」と「木村先生のアクティブラーニングの実践について」という2つのテーマでお話を頂いた。

参加者は16名（立命館中高2名、立命館小2名、立命館宇治中高4名、立命館慶祥中高3名、立命館守山中高5名）であった。

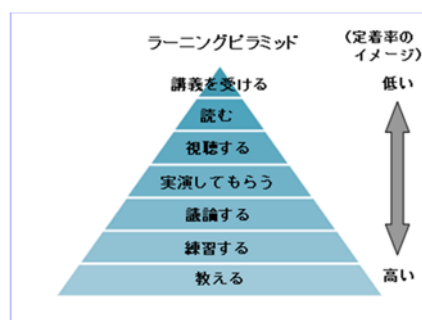
【研修の記録】

「情報化社会の現状と情報モラル」では、まず現代において情報とは、①見極め、取捨選択が必要なもの、②形のないものであり、受け手によって意味が変わるもの、③情報によって人は振り回され、しがみつくこともあり、あり過ぎるとないに等しくなるもの、ということであった。我々大人でさえ、日々情報のシャワーを浴びており、どう受け取り、どう自分なりに処理をしていくかが非常に難しくなっている。現在の生徒たちも携帯電話（+タブレット）を家族との連絡手段という本来の目的以外にも友人間のコミュニケーションツールや自らの情報発信元として活用している。しかし、その中で、伝わり方の違いから派生するいじめ（なんと9割の生徒がネットいじめをした、された経験あり）やゲームの課金システム、簡易なつけ払い方式など様々な危険が潜んでいる。デジタルタトゥーのように一度ネットに出たものは一生消えないものである。しかし、脳は25歳まで判断力が未完成である。デジタルネイティブである生徒たちと情報とのかかわりを我々教員がどう介入していくか、どう情報モラル教育を行っていくかが今後の大きな課題であると木村先生から伺った。



一方、インターネットの活用法もいくつかの興味深い例を紹介して頂いた。まず一つ目は、TEDにも登場した高校生の Wikipedia などを使いやすい臓がんを早期発見するための方法の考案、Twitter を使った東日本大震災時の防災ヘリの出動要請、インドで映画化もされた Google Earth を使って故郷に帰る感動秘話など、インターネットは世界の問題や課題、疑問などを解決できる有効なツールの一つであることを教えて頂いた。

後半部分は「木村先生のアクティブラーニングの実践について」のお話を頂いた。まず前提として、アクティブラーニングとは2030年のグローバル化と少子高齢化を見据え、その時代の多様な選抜に対応する学習スタイルの確立が必要ということで推進されている。木村先生は、単純で効果的なアクティブラーニングは生徒同士の「学び合い」であり、その目標を、他生徒に教えられるようになること、全員が達成できるようになること、一人の生徒も見捨てないこと、に置いているとのことであった。その木村先生の実践例は非常に興味深く、さるかに合戦を小学校と共同してデジタル紙芝居にされた例や、ビデオ会議方式のミニ四駆の他附属校との対戦、そしてニュージーランド研修時のNHK デジタルを活用して交流した方に日本を紹介したことなど、斬新な実践例であった。



また、各附属校のICT事情の共有もあり、情報化社会の現状を知ることができ、情報モラルについて考え、そしていかにアクティブラーニングを実践していくか、考えることができた有意義な2時間半であった。

（記録：立命館守山中学校・高等学校 竹田 健二郎）

（編集 附属校教育研究・研修センター 羽田 澄）